四季の移ろい
～日々の暮らしの中から⑥～

夏の2度の台風がうそのような秋日和が続く。30坪余の庭を散歩していると、四季の移ろいを感じる。

「移ろい」という言葉には「盛りを過ぎる」「色が衰える」という意味もある。まさに「四季の移ろい」とは人生のようなものだ。

それにしても四季をもたらす自然の素晴らしさに感動することが多くなった。年齢のせいだろう。今の庭の花の中心は秋明菊、鶏頭と平凡なものばかりだが、じっくり観察していると、何か神の存在を感じる。

過日、バラの花をくれた友が訪ねて来た。もらったバラの茎を花壇に植え、周囲に卵の殻や液肥をやっていたら、見事なつぼみをつける。ちょうど今、花を咲かせているので、友を案内する。ピンクのふちの白いバラに改めて驚きを感じる。何と自然の営みは私たちを癒やしてくれることか…。

バラの話をしながら応接間と庭の間のサンルームで紅茶を飲む。長女がイギリスに行く度にいろんな紅茶を送ってくれるので、それにクッキーを添えるのが我が家での最高のもてなし。これが至福の時だ。

自然の営みは間違いなく私たちに癒やしを与えてくれる。それをどう受け止めるかには個人差がある。しかし高齢になるとなぜかそれを共有出来るようになる。特にこの秋という季節の中に「人生の秋」を感じるのは私だけではあるまい。

郵便屋さんが友人からの手紙を届けてくれた。中には「教会の友人が藤屋さんの庭を見に行きたいと言ってます。彼女は最近目が悪くなり、間もなく完全に見えなくなるので、その前に訪れたい」とある。

何とうれしい便りだろう。我が家の庭は決して人に誇れるようなのではないが、そこに共通の喜びを期待している人がいるとは。

平凡な庭ではあるが、ここは自然の営みを共有出来ることが誇らしくもある。

庭の花々に散水していると、妻が「お父さん、秋の七草を知っている」と話しかけて来た。以前は全種類あったらしいが、今はほとんどない。

女郎花（おみなえし）、藤袴（ふじばかま）、萩（はぎ）、葛（くず）、桔梗（ききょう）、撫子（なでしこ）、薄（すすき）。桔梗だけが今も花を咲かせる。「秋の七草」は食べられないが「春の七草」は食べられるというのも不思議な話よねと妻は言う。

芹（せり）、薺（なずな）、御形（ごぎょう）、繁縷（はこべ）、仏座（ほとけのざ）、菘（すずな）、蘿蔔（すずしろ）。

秋の夜長、辞書を片手に「秋の七草」「春の七草」を調べてこうして原稿に書く。当用漢字にないものも多く、やっと書きあげる。

きょうから11月、小菊のつぼみがあすあたりから花を咲かせてくれるのが楽しみだ。

夕食に友人から届いた「栗ごはん」を食べてあとの、のんびりとした秋の夜長である。

花持ちが長い秋明菊

可憐なバラの花

平凡な鶏頭も庭の大切な仲間だ